魔法戦記バカテスForce

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記バカテスＦｏｒｃｅ

【Ｎコード】

Ｎ９５４６Ｚ

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

魔法戦記なのはＦｏｒｃｅとバカとテストと召喚獣の二次創作の僕とちっさい幼なじみのキャラが出演するオリストーリです！

プロローグ？

ルヴェラ鉱山遺跡…

遺跡入口前にて

「ここが報告があった遺跡なんだね。ミナミ？」

「そうよ。アキ」

アキヒサの友人であり仕事上のパートナーのミナミ・シマダと一緒に大穴の中へと歩を進めていく。

大穴の中をしばらく進むと、先行している発掘班が数人集まっている広い部屋に出た。

その先にはまだ、道が続いている。どうやらこの先が対象がある部屋らしい。

発掘班の一人がアキヒサ達に気づいたらしくアキヒサ達の傍に来て説明をしてくれた。

「ようこそいらっしゃいました。アキヒサ先生とミナミさん、この先が対象があると思われる部屋です」

「分かった。君たちは後ろに下がって、僕達は先に進むから」

アキヒサの指示で発掘班は頷いて後方に下がり、アキヒサとミナミは先に進んだ。

此処から先は安全が保障されていない。故に、進むには細心の注意を払う事になる。

「とりあえず、何が待ってるか分からないからね。細心の注意だけは払ってね」

「言われなくても」

アキヒサがその旨をミナミに伝え、ミナミもそれを聞いて表情を引き締める。

ついでに首かけているインテリジェントデバイス「スティード」にも指示を出した。

「スティードも警戒を頼むよ」

『了解、アキヒサ』

覚悟を決め、ミナミと共に奥へと進む事にする。

……しばらく進むと、段々と視界が明るくなっていく。

それから更に歩を進めていくと、朽ち果てた研究所があった。

「……薄気味悪いとこだね」

「そ、そうね」

『ヤバイ物がいっぱいありますね～』

遠目では分からなかったが、近づいて見てみるとそれがとんでもない代物である事に気付く。
カプセルの中には奇妙なモノが浮いている。

「スティード、これはまさか……」

『何かの実験ですね。しかも大分ヤバイ方向の』

アキヒサがスティードに言うとスティードは確信するように答えた。

「あ、アキ。こっちにきて」

「なんでこんなところに少女がいるの？」

ミナミがアキヒサを呼ぶのでそちらに行くと小学生みたいな少女が何かの土台に貼り付けにされていた。
まるで成長が止まっているかのように…。胸だけは大人のようなサイズのようだけど。
身長は１３９くらいかな？

キイン

少女に近寄ろうとすると謎の音とともにアキヒサの目に痛みがきた。

「あッ！づ……っっ！」

「ちょ、アキ。大丈夫！？」

まるで焼けるような痛みにアキヒサが目を抑えるとミナミが心配そ

うに聞いてきた。
腕に赤い輪みたいなのが巻きついてきている。
「ダメ、ダメだよ！こっちに来たら貴方も死んじゃうよ？」
はりつけにされている少女はとても悲しそうに言う。
少女の目には涙が浮かんでいた。
「死ぬ？死ぬってどーいうことよ」
「……それは」
ミナミが不機嫌そうに聞くと少女は俯いて口ごもる。
何か言いにくいことなのは確かだ。
「ま、詳しい話しは後で聞くわ。ここから出なくちゃいけないしね」
『それに関しては同感です』
そう美波が言うとスティードも同意して明久に近寄ると立たせて。
「ミナミらしいな。あのさ、よくは分からないけど、ここから一緒に出ようよ」
「…でも」
アキヒサが笑って言うと黒髪の少女を見て笑顔で言った。
少女はそれに戸惑っていた。
「君に近づいたら死ぬなんてこと絶対ないと思うし。それに、一人

でここにいるのは寂しいと思うよ？」

「そうよ、死ぬなんてことはデマかもしれないんだから！」

アキヒサは微笑んで手を差し出すとミナミは同意するように言う。

「……ありがとう」

少女はそれを聞いて嬉しそうに笑う。

するとアキヒサの右手首と少女の手首に輪がでてきて、少女を張りつけにした台が壊れてしまう。

「あ！危ない！」

アキヒサがそれに気づいて駆け寄り、抱きとめる。

プロローグ？

「てて…っ。大丈夫ッ！？」

「うん……変わらないね。アキくんは」

アキヒサが少女を抱きとめて無事を確認すると少女はくすっと笑って呟いた。

「え？君は」

「なんで、アキのこと知ってるのよ？」

アキヒサは不思議そうに言うとミナミも不思議そうに問いかける。

「え…えっと…なんとなくそんな気がしたの」

少女はその問いに苦笑いしながら答えた。

「なんとなくって…」

「そ、それより！服を着せないと！！」

ミナミが少女を見て呆れながら言うとアキヒサは慌てて言う。

アキヒサが慌てる理由は少女が全裸だったからだ。

「あ、そうね！えっと…これでもないよりはマシかしら」

ミナミはアキヒサの言葉に気づいて慌てて鞄から衣服を取り出すと、

それを着せる。

「ありがとう、ミナミちゃん」

「どういたしましてって…なんでウチのことも知ってるのよ」

少女はぶかぶかのワイシャツを着るとお礼を言い、ミナミが笑顔で言ってから驚きながら言う。

名前も名乗ってないのに少女は知ってるということはミナミとアキヒサには不思議だった。

「貴女のことも…なんとなくわかるの」

「なんとなくね。嘘じゃないのはわかるけど」

苦笑いして少女が言うとミナミは少女を見て嘘をついてないことを理解する。

ビービー！！

突然、警報が鳴り響く。

《警告警告、この施設はまもなく崩壊します》

「「「え！？」」」

その警告音にミナミとアキヒサとスティードが驚く。

「あっちの方に脱出する出口があるよ」

「え？」

少女はアキヒサの服の袖を引っ張ると指で本棚の方を指さす。

「ちょっと、アキはその子と居てね」

「あ、うん。」

ミナミがそれを聞いてアキヒサに言うと本棚を調べて隠しスイッチを見つけてそれを押す。

ゴゴッ！

「開いたわ！急いで」

「う、うん」

『急ぎましょう、アキヒサ』

ミナミはアキヒサを見て言うのでアキヒサは頷いて少女を姫抱きしてスティードと一緒に隠し扉の方に向かう。

隠し扉に入ってアキヒサ達は出口へと急ぐ。

「重くない？」

「平気だよ、君は軽いし」

少女が不安そうに聞くと明久は笑顔で答えながら走る。

「光だわ、出口よ！」

「よーし！」

『急ぎましょう！』

ミナミが出口の光を見て言うとアキヒサは足を動かす。少女はアキヒサに凭れていた。

出口から外に出ると

「アキヒサ先生、ミナミさん。ご無事でしたか！！？」

研究所の外で待機していた人が慌ててこちらに来た。
どうやら研究所が突然、崩壊したので心配したようだ。

「うん、君達も怪我はない？」

「自分達は平気です」

アキヒサは頷いてから話しかけた人に尋ねるとその人は笑顔で答えた。
ぞろぞろと待機していた人が集まってミナミとアキヒサの無傷な姿に安堵していた。

「先生が無事でよかったですよ」

「まったくです。にしてもなんでいきなり崩壊したんでしょう？」

発掘班の一人が言うともう一人が同意して不思議そうに呟いた。

（確かにそうだ、少女が張りつけから解除されたら崩壊しはじめたこともわからない。
もしかしたら少女を解放したらそうなるように仕掛けられていたのでは？）

アキヒサは発掘班の会話を聞いて考え込んでいた。

「アキ、そろそろその子を下ろしたら？」

「へ？…あ！ご、ごめん！」

ミナミが考え込むアキヒサに声をかけて言うとアキヒサは今の状態に気づいて少女を優しく下ろした。

「……ううん。大丈夫」

「なら、良かった」

ふにゃりと笑う少女を見てアキヒサはホッと安堵して微笑んだ。
少女はアキヒサの笑顔を見て頬を赤らめて俯いた。

「ふ～ん…良かったわね、アキ♪アンタに春がきたかもよ」

「へ、春ってどういうこと？」

ミナミはその様子を見てニヤニヤと笑って言うとアキヒサはきょとん、とした表情で聞き返す。

「……はぁ」

「え、なんでため息つくの！？」
ミナミが呆れてため息をつくとアキヒサは慌てて言う。
少女はその様子を苦笑いしながら見ていた。
「ところで、先生。その少女は？」
「あ、研究所の奥で見つけたんだ」
発掘班の一人が明久を見て聞くとアキヒサはすぐに答えた。
「？それはおかしいですね、こんな研究所に人がいるなんて」
「でも、居たんだからくつがえしようがないのよね」
それを聞いた発掘班が不思議そうに呟くとミナミが少女を見て言う。
『とりあえず、アキヒサがこの少女の面倒見るのはどうでしょうか』
「それはいいわね！服や靴とか揃えてあげたいし」
スティードが言うとミナミは笑顔で賛成する。
「僕は全然構わないけど。君はそれでいい？」
「あ、うん。行く所ないし、それでいい」
アキヒサはその会話を聞いて苦笑いしてから少女を見て聞く。
少女が笑顔で頷いたのを見て

「じゃあ、決まりだね」

「じゃ、今日は解散にしましょ。研究所も壊れちゃったし」

アキヒサが笑顔で言うとミナミはこれからの予定を決めた。

「わかりました。先生、ミナミさん。お疲れ様でした」

「では、また後日に」

発掘班はそれを聞いて頷くとそれぞれ帰って行く。

「さて、ウチ等も帰りましょ」

「うん、そうだね」

ミナミが笑顔で言うとアキヒサも頷いて車に乗って研究所跡から去る。

アキヒサ達が去った後、この場に倒れていた男が目を覚まして、どこかに電話していた。

「さ、サンプルが何者かによって連れて行かれた。至急手配を頼む」

『了解、至急手配する。任務御苦労』

男はそれを聞いて気絶した。

プロローグ？（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第一話　リアクト　誓約《エンゲージ》

ブ――――ン！

アキヒサ達は謎の研究所跡から居た少女を連れて車に乗って帰宅している。

ミナミとは途中で別れている為そばにいない。

いや、正確にはアキヒサが所属している大学に向かっている。

なぜそこに向かっているのかというとアキヒサの恩師が今そこに滞在しているからである。

「……どこに向かってるの？」

唐突に少女が聞いてきたので明久は少し考えてから話をした。

「え――――とね。君のことを調べるために僕の恩師が居る大学に向かってるんだ」

「そう……」

少女は悲しそうな顔をして下を向いている。

その様子で空気が悪くなっていた。それを見た明久は

彼女を元気にするために話しかけることにした。

「僕の名前はアキヒサ。アキヒサ・ヨシイ。君の名前は…？」

「え？アキヒサくん……。そっか世界が違って本質は変わらないんだ。だったら…うん」

「？？？？？」

少女は明久の名前を復唱するとどこか嬉しそうな顔をしている。

明久は少女の笑顔が不思議だった。

「じゃあ。私は今度からアキくんと呼ぶね。うん♪私はこっちの方がいいから」

「……え！？う、うん」

明久は少女の笑顔にどきりとして思わずどもってしまった。

「私の名前はツグミ。ツグミ・シュトロゼック」

「そうか。ツグミか良い名前だね」

少女も笑顔で自己紹介した。

アキヒサはそれを見て笑みを浮かべて言う。

「ふぇ／／／／」

「？？？？」

ツグミはアキヒサの笑みと台詞に固まった。

その様子に明久は再びなんでだろう？と思った。

明久はただ名前を褒めただけなのだ。
それを聞いてツグミは顔を赤くしているのだから。
空気が和んだのだから問題なと割り切って車をアキヒサは運転する。

パラパラパラッ！

とヘリコプターの音がして

ウィーン

ヘリコプターに搭載されている機関銃が動き

ズダダダダダダ！！

車にめがけて撃ちだした。

「「！？」」

するとアキヒサが運転してる車に銃弾の嵐が降ってきた。

「ちっ！、なんで狙われるんだよ！」

「……それは、私が狙いだからだよ」

アキヒサが車を動かして銃撃を回避すると呟いた。
するとツグミが悲しそうに俯いて答えた。

「は！？」

アキヒサはそれを聞いて驚きながらツグミを見る。

「多分、今襲われているのは私の回収と目撃者の始末だと思う」

「んな！？」

ツグミの発言にアキヒサは驚きをかくせなかった。
なぜそんなことになってしまったのかわからない、ただ…一つだけ言えることは。
今のままだとアキヒサ達は殺されてしまうということ。

「くっ！」

アキヒサはこの場からなんとか逃げようと車を動かしてスピードを上げる。

「（もう…今はこれしか方法がない…よね）ごめん、アキくん」

「は？」

アキヒサの横顔を見てツグミは決意すると手を握って目を閉じる。
その様子を見てアキヒサは不思議そうな顔をする。

『リアクト　誓約（エンゲージ）』

ツグミとアキヒサの周りを不思議な文様が浮かび包む。
アキヒサの右腕にツグミと同じ腕輪がつけられる。

ドォオォン！！

そして爆発が起きて車が大破する。
それを確認してヘリコプターに乗ってる人が

「やったか！？」

と呟いた。

「しゅ、主任！」

「なんだ！」

隣に乗っていた研究員が信じられない物をみた顔をしていた。
なぜなら…

煙がはれるとその中に人影が二人いたからだ。
アキヒサの服装は変化しており、黒い戦闘防護服に身を包み、髪の色が銀、瞳の色が赤になっていた。

アキヒサは手を伸ばすと銃剣が出現し、

《Ｅ－Ｃ　Ｄｉｖｉｄｅｒ　Ｃｏｄｅ－９９６》

上空へと銃剣を向け

《Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ》

「…ディバイド　ゼロ」

アキヒサの肩手でツグミを支えて呟いた。

ドゴッ！

そして、とてつもない威力の集束砲が銃剣から放たれる。
ヘリコプターにそれがかすめ

「このままだと持ちません！」

「くっ…撤退だ！」

運転してるヤツが言うと主任とよばれた男が指示をしてこの場から離れる。

＊＊＊＊＊

『アキヒサ　アキヒサ！』

「んあ？…え…あれッ！？」

スティードの声にアキヒサはハッと気づいて周りを見る。
ツグミは座りこんで成功してることに安堵していた。

『大丈夫ですか　アキヒサ。それになんです？そのイカした格好は』

アキヒサの右そで？からスティードが出てきて尋ねる

「うおお！なんじゃこりゃあー！！」

「そんなに慌てなくても」
アキヒサが叫ぶとツグミが苦笑いしながら言う。
「あ」
銃剣が光につつまれて消えるとアキヒサは呟いた。
バシュ！
「おお！」
それに続いて服装も戻ると驚きの声をあげる。
そして右腕についた腕輪に気づく。
「（あれ…なんだ、この腕輪）」
まじまじと自分の右腕についた腕輪をアキヒサが見ていると
「アキくん…体は大丈夫？」
「へ？あ、うん。平気だけど」
ツグミが近寄って尋ねてきたのですぐに答えた。
それを聞いたツグミは胸に手を当てて安堵していた。
「ドキッ）そ、それより！大学までいかないと！
スティード、周辺チェック！」

『オーライ　アキヒサ』

アキヒサはツグミの笑顔を見て顔を赤らめたままスティードに指示をする。

第一話　リアクト　誓約《エンゲージ》（後書き）

今回はツグミとアキヒサの初めてのリアクトです！
原作の彼女と違い記憶壊れもしていませんが、まだ初期なので融合はしていません。
アキヒサが驚くかもしれませんからね☆

設定

名前）
アキヒサ・ヨシイ

年齢）
１５歳

身長）
１７６ｃｍ

容姿）
茶髪の短髪でバカっぽい顔ではあるが、少しだけりりしい顔立ちである。
服の中の肉体はきちんと引き締まっており、筋肉もしっかりしている

性格）
優しいけど真面目。

出身地）
ミッドチルダ

趣味）
発掘調査

備考）
恩師であるセタに助けてもらい、遺跡に興味を持ち、今の大学に通っている。
喧嘩に強くていつもセタに格闘術を教えてもらってる。

相棒の『スティード』をいつも首につけている。
発掘調査中にツグミを見つけて確保する。

＊＊＊＊

名前）
ツグミ・シュトロゼック

年齢）
不明

性別）
女

身長）
１３９くらい

容姿）
黒髪のロングヘアーで黒色の瞳で可愛い。
胸はＦくらい。

出身地）
不明

趣味）
まだない

備考）
アキヒサに遺跡から連れ出してもらった謎の少女。
誓約（エンゲージ）をアキヒサにほどこした子。

別の世界の自分の記憶をもっている為、ミナミとアキヒサの名前がわかった。

＊＊＊＊

名前）
ミナミ・シマダ

性別）
女

容姿）
薄い茶色のポニーテール。
つり目だけど綺麗な緑色の瞳

性格）
明るくて頼もしく誰よりも仲間を大事に思ってる。
ツグミを妹のように思っている。

備考）
アキヒサの大学でのクラスメイトであり、相棒でもある。
遺跡での発掘調査の為に一緒に来ていた。
そこでツグミを見つけて確保して先にセタに事情説明することになった。

設定（後書き）

アキヒサとツグミの軽い詳細です！

第二話　大学にて

大学に行く前にアキヒサはツグミの服と靴を購入して歩いて大学に向かった。

「歩ける？」

「うん、大丈夫だよ。アキくん」

アキヒサが歩きながら尋ねるとツグミは笑顔で答える。

しばらくして大学に着くと中に入り、セタを捜す。

「あれ、アキヒサ先輩。どうしたのですか？」

「あ、実は…セタさんを捜してるんだけど、知らないかな？」

同じ大学の後輩が尋ねるとアキヒサが苦笑いしながら言う。

「セタ先生ですか？いえ、僕は見てませんが」

「……そう」

後輩が悩んでからすぐに答えるとアキヒサは落胆した。

「ところで…そちらの彼女は？」

「あ…えっと、彼女はツグミといって」

ツグミに気づいた後輩が聞くとアキヒサは悩みながらも説明すると

「アキヒサ先輩の彼女なわけですね！」

「いや、違うから！というか、ツグミに失礼じゃないか！！」

目をキラキラさせて後輩が言うのでアキヒサはツッコミをいれていた。

それを聞いた後輩が

「……はぁ…先輩。大学でかなりの人気なの気づいてないんですか？」

「え、そんなこと初めて知ったんだけど」

後輩が呆れて言うとアキヒサが驚いて呟いた。

「あ、ミナミちゃん！」

「ん？…おっと」

するとツグミは誰かを見つけたのかてとてと、走ってミナミに抱きついた。

ミナミはツグミを優しく抱きとめる。

「あら、可愛い服ね。アキに買ってもらったの？」

「うん！ミナミちゃんが教えてくれた服屋で買ったの！」

ミナミはにこにこと笑ってツグミの頭を優しく撫でて聞くとツグミ

は笑顔で答えた。
仲の良い姉妹のような光景だ。
ツグミの格好はブラウスに胸元にリボンをつけた服にフリルのあるスカートを着ている。

「役に立てたのなら良かったわ」

「ミナミ！　ごめんね。ツグミが急に抱きついて」

笑顔でミナミが言うとアキヒサと後輩が近寄り、アキヒサがすまなそうに謝る。

「あら、別にいいわよ？ツグミ軽いし、可愛いしね」

ミナミは怒るようすもなく笑顔で言い、ツグミの髪を優しく撫でていた。

「ミナミがそう言うならいいけど。
あ、そうだ！僕セタさんを捜すからツグミのこと預かっていてくれない？」

「それなら別にいいけど、探してどうすんのよ」

アキヒサが苦笑いして呟くとハッと思いだして
申し訳なさそうに頼むとミナミはきょとん、とした様子で答えた。

「ツグミのことと、この腕輪のことを調べてもらおうかと思って」

「……なるほどね。理解したけど…ツグミに嫌な思いさせるんじゃないわよ？」

アキヒサがミナミを見て言うとミナミは納得してからジト目で見つめて忠告する。

「うん…わかってるよ。僕もなるべく嫌な思いさせたくないし」

アキヒサは頷いて答えると後輩と一緒に歩き出した。

「じゃ、ツグミはウチと図書室にでも行きましょ」

「うん！」

ミナミが笑顔で言うとツグミは笑顔で頷いて手をつないで図書室へと歩き出した。

第二話　大学にて（後書き）

感想と評価をお待ちしております♪

この世界のツグミは少し甘えん坊になっております☆

気に入った人には抱きついて甘えてしまうところがあるようですね♪

第三話

ドゴーン！！

という音と共に車が大学の中へと乗り上げてきた。

「……セタさんだね」

「そのようですね。先輩」

アキヒサが呟くと後輩が頷いてハリセンを手渡した。

息の合うコンビである。

「や～…あっはははは♪眠りこけるとすぐこれだ」

「いい加減にその登場の仕方はやめてください！！」

セタが車の扉を開けて出てくるとアキヒサは近寄ってハリセンを構えてセタへと振りおろした。

「おろっ！？」

セタがアキヒサのハリセンを受けてそのまま床に倒れ伏す。

「はぁ…いつも言ってるのになぁ」

「仕方ないですよ。それがセタさんですから」

ハリセンをしまうアキヒサに後輩が近寄って苦笑い。

「イタタ…ところで、何か用事があったんじゃないのかい？」
「相変わらず復活が早いですね。まあ、いいですけど…実は」
セタが起き上がって聞くとアキヒサは呆れながらも事情を説明した。
「なるほど…古びた遺跡に小さな女の子がいたと」
「はい、それで保護してここまで連れてきたんです」
セタはその話を聞いて腕を組み考えるように呟いた。
アキヒサは頷いてセタを見た言う。
「今、その子はどこに？」
「今はミナミと一緒に図書室にいると思います」
セタがアキヒサに尋ねるとアキヒサはすぐに答えた。
「じゃあ、その子の所に案内してくれないかな？」
「はい」
セタは笑顔で言うとアキヒサは頷いてセタと共に歩いて図書室へと向かう。
「へぇ…あの子かい？」
「はい」

図書室に入るとセタはツグミを見てアキヒサに尋ねるとアキヒサは答えた。

「ふむ…」

「何かわかりますか？」

セタはツグミを見て呟くとアキヒサが尋ねる。

「わかったことは…アキヒサ君にも春が来たってことだね」

それを聞いてアキヒサはずっこけた。

「違います！あの子は遺跡から」

「あはは…冗談だよ♪」

アキヒサが立ちあがって言うとセタは笑って言う。

「君の腕輪とあの子の傍で浮いてる本は…古代ベルカの書物で読んだことあるよ」

「え、じゃあ！？」

セタが真面目な顔で答えるとアキヒサは驚きながらセタを見る。

「でも…古代ベルカは昔に滅びたはずなんだ。

君が調べた遺跡は見た目は遺跡だけど実際はこの時代の研究所だよ。

この事から彼女は生物兵器である可能性が高い」

「！」

セタはアキヒサを見て言うとアキヒサは驚いた表情で息を飲む。

「でも、少なくとも今の状況ではその心配はないと思う。
どうしても気になるのなら、ミオさんの所に行ってきたらどうだい？
彼女なら何か知ってるかもしれないよ」

「ミオ博士のところにですか。そうします、忙しいところありがとうございました」

セタがアキヒサを見て微笑んで言うとアキヒサは頷いてからお礼を言った。

「いや、役にたったのならそれでいいよ」

セタはそう言うと歩いて行く。

「アキくん！」

「おっと！」

ツグミが駆けよりアキヒサに抱きついた。

「アキ、用事は終わったのね」

「うん。ここでのはね」

ツグミの頭を撫でながらミナミが尋ねるとアキヒサは頷いて答えた。

「ということは」

「うん…リュウのいる家に向かうことにするよ」

ミナミは予測がついたのかアキヒサを見て言うとアキヒサは頷いた。

「そう…気を付けて行くのよ」

「そうするよ」

ミナミがアキヒサを見て言うとアキヒサは頷いてからツグミを抱き上げて歩き出す。

「ひゃわ!?あ、アキくん!恥ずかしいよ〜」

「ちょっと、我慢してね」

ツグミが暴れて言うけどアキヒサは笑顔で言ってそのまま歩く。

『アキヒサのすきにさせてあげてください。一度決めると頑なに実行しますから』

「うぅ…スティードは人ごとだと思って」

アキヒサの首にかかったスティードが言うとツグミはぽつりと呟いた。

『人ごとですし☆』

「うぅ～…スティードも意地悪になってきてない？」

スティードを見つめてツグミはうらみがましくしていた。

第三話（後書き）

感想と評価をお待ちしております☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9546z/

魔法戦記バカテスForce

2012年1月6日16時28分発行